東京石桜同窓会（会長・前関邦明、新 23 回生）の平成 28 年度総会・懇親会（実行委員長・武田範夫、新 24 回生）が 10 月 1 日、東京・上野の「上野精養軒」で開かれました。この日はちょうど、ふるさと岩手で第 71 回国民体育大会（岩手国体）が始まり、何かと岩手の話題で盛り上がるなかでの開催となりました。それだけに来賓を含め総勢約 50 人が集まった会場は終始、途切れることのない笑い声に包まれ、大いに盛り上がりました。

今年は第 1 部で、平成 11 年から 22 年まで校長を務めた菊地治雄先生（新 10 回生）に講演をお願いしました。「母校と歩んだ人生を語る」と題した講演で、菊地先生は音楽とかかわるきっかけや岩中・岩高の音楽教師として歩んだ人生の思い出などを明かしてくれました。菊地先生は昭和 40 年から岩中・岩高の教鞭をとりましたが、その長い教師生活の中でも一生忘れられないのは、「やはり昭和 52 年（1977 年）の校舎火災」だと力を込めました。このときは教員をはじめとする関係者が急きょ集まり、不眠不休で対応を協議したといいます。しかし、菊地先生の心に残ったのは、この不幸な出来事のなかで、指導していたブラスバンド部員が見せた不屈の魂だったようです。楽器もすべて消失したなかで、ブラスバンド部員は吹奏楽大会への出場をあきらめないと宣言。実際、それを成し遂げたのでした。これこそが母校が一貫して教えを説いてきた「石桜精神」なのは言うまでもありません。
菊地先生の講演に引き続き総会・懇親会に移り、この 1 年の間に逝去の報告があった３人の同窓生に黙祷を捧げたのち、上野英夫副会長（新 20 回生）が開式の辞と活動報告および会計報告を行い、全会一致で了承されました。続いて前関会長の挨拶の後、来賓である岩手奨学会の三田義之理事長、母校の村井伸吾校長、石桜同窓会の小枝指博会長（新 9 回生）からご挨拶を頂戴しました。

乾杯の音頭は佐々木英雄氏（新９回生）が取り、年齢を感じさせない張りのある声で「カンパーイ」とマイクを使わずに発声し、参加者も再会を喜ぶかのようにグラスを高々と上げました。

しばし歓談の後、サプライズイベントとも言える幻のフィルム上映会に移りました。
存在はしつつも、出場選手すら知らなかった昭和 30 年の母校野球部の甲子園出場を記録したフィルムの公開です。このオリジナル映像を制作したのは、洞窟写真の個展を開くなど、カメラ通であった当時の地理教師である中村嘉明先生です。地区大会で優勝した当時の盛岡市内の熱気などを含め、この貴重な記録を後生に残そうと石桜同窓会と東京石桜同窓会が主体となり、このフィルムの再編集を共同で企画しました。フィルムについては映画録音の日本の第一人者で映画界に人脈の広い瀬川徹夫氏（新 14 回生）の助言はじめ、出場選手ら関係者の協力を得て、石桜同窓会の赤澤征夫常任理事（新 9 回生）がシーンに合わせて当時の記録写真を挿入し、時系列に再編集。さらにはナレーションも加えるなどして完成度を高めたものです。一連の作業を終えたのは総会・懇親会前日の９月３０日ということです。時間の都合で上映は一部にとどめましたが、61 年前の若き岩高ナインの勇姿に盛

岡・長田町で過ごした青春時代を思い出した方も少なくなかったことでしょう。ちなみに甲子園では、初戦で神奈川県代表の法政二高を 3 - 0 で撃破。2 回戦では香川県代表の坂出商業に 1 - 3 で惜しくも敗れました。乾杯の音頭を取った佐々木英雄氏もレギュラーとして同甲子園大会に出場し、活躍しています。

参考までに今回試作した DVD ビデオのタイトルは「「昭和３０年　甲子園大会出場の記録（岩手高校野球部)」です。

この後、本校から参加いただいた和田健一郎副校長（新 30 回生)、石桜同窓会の武藤副会長（新 14 回生）にも登壇をお願いし、近況などをお話しいただきました。

一方、今回は宇宙開発を学んでいる大学生の池田勝紀君（新 67 回生）ら数人の若きフレッシュメンバーが駆け付けてくれたのも特徴でした。同窓会担当の中山泰志先生（新 39 回生）が各人を紹介し、それぞれが一言述べると、会場からは「ガンバレーッ」と激励の声が飛びました。

こうして会場が熱気に包まれるなかで、クライマックスとも言える校歌斉唱へとプログラムは進み、前関会長のリードで「旭日に　におう桜花…」のあの名曲が上野の森に響きわたりました。

次いで佐藤忠男氏（新 12 回生）のかけ声で万歳三唱、佐藤勝久氏（新 10 回生）の関東一本締め、藤原文夫副会長（新 22 回生）の閉式の辞で今年度の総会・懇親会の幕を閉じました。会場では終了後も記念写真を撮ったり、話し込む同窓生姿があちこちに見受けられました。岩手県下唯一の男子校である岩中・岩高同窓生の絆の強さを示すものと言えるでしょう。これを育んだ独特の校風をこれからも守り続けたいものです。（文責・武田範夫）